

看護学生のエイジズムに関する研究

吉田 浩二¹・辻 麻由美²・原田 文子¹・大山 祐介¹・竹嶋 純平¹・宮原 春美¹

要 旨

【目的】わが国の高齢者人口の増大に伴い高齢者に対する看護の担い手として看護学生が期待される。本研究は、看護学生が潜在的にもつ高齢者へのエイジズム（年齢差別）の実態を明らかにすることを目的とする。

【方法】対象はA大学の看護学生で同意が得られた200名（2年生66名、3年生66名、4年生68名）とし、日本語版 Fraboni エイジズム尺度（FSA）短縮版を用いた調査を行った。FSA 短縮版は14項目からなり、「① そう思う」から「⑤ そう思わない」の5件法で求め、5-1点で得点化する。合計点が高いほどエイジズムが高いことを示す尺度である。収集データから、学年間および同居経験の有無での FSA 得点を統計学的に比較した。

【結果】各学年の FSA 平均得点は2年生26.7±5.9点、3年生26.8±6.3点、4年生26.0±6.1点で、学年比較で有意な差はみられなかった（ $P=0.72$ ）。一方、高齢者との同居経験の有無の比較では、同居経験ありの群で下位項目「誹謗」のみ FSA 得点が有意に高かった（ $P<0.05$ ）。

【結論】本研究では、老年看護学の履修状況によるエイジズムの違いはみられなかったが、高齢者との同居経験における違いがみられた。老年看護を担う看護師の育成に向けて、継続して看護学生のエイジズムを含めた高齢者に対するイメージを把握し、老年看護学教育をすすめていく必要がある。

保健学研究 30 : 39-46, 2017

Key Words : the elderly, ageism, nursing student, gerontological nursing, the Fraboni Scale of Ageism

（2017年3月8日受付）
（2017年5月22日受理）

I. 緒言

わが国では、高齢者人口の増大により、高齢者の医療・福祉に対する社会の需要がますます増加しており、それに伴い高齢者への看護の担い手となる従事者はますます求められ¹⁾、また看護学生への期待の高まりも予測される。看護学生は、高齢者に対して豊かさや穏やかさといった肯定的なイメージを持っている^{2,3)}、一方で、親しみにくいや暗いといった否定的なイメージをもつことが報告されている^{4,5)}。高齢者に関わる機会の多い保健・医療・福祉の専門職の高齢者に対するイメージや態度は、ケアの質に影響を与える可能性があり⁶⁾、特に高齢者への偏った見方や態度は、高齢者の権利を擁護する立場にある看護職の倫理的態度に影響する。そういった傾向から看護学生は職場選択にあたり、医療ニーズの高い急性期病棟や、小児・母性看護を志向し、高齢者を対象とする職場を避ける傾向が指摘されている^{7,8)}。

老年看護学教育においては、健康な高齢者の状況や高齢者の個別性や多様性を理解できる教育の必要性が指摘されている⁹⁾。老年看護学教育では、高齢者のイメージに関連するものとして、高齢者に対するスティグマやエイジズム¹⁰⁾といった社会に存在する差別用語を用い、そ

の中でアドボカシーの視点の重要性を伝えている。しかし、高齢者の肯定的な部分に視点を向ける過程において、潜在的に存在しうる高齢者に対するスティグマやエイジズムが先行し、高齢者に対する否定的なイメージを払拭できていないことも考えられる。看護者の高齢者イメージは看護に取り組む姿勢の源となり、看護の質・内容に影響するため、学生の高齢者のイメージを把握し、教育による変化を分析することは、老年看護学の教育評価において重要である。看護学生が、加齢に伴う変化についての正確な知識をもち、高齢者の多様性や個性に配慮した看護を展開できる基礎的能力を獲得するため、高齢者への偏見や差別というエイジズムの視点から、看護基礎教育における課題を明らかにする必要がある。

本研究は、看護学生のエイジズムに着目し、学生が潜在的に持つエイジズムの実態および学年別での傾向すなわち老年看護教育履修状況（講義や実習等）や高齢者との同居経験による関係を明らかにし、老年看護学の教育内容について検討することを目的とする。

II. 用語の定義

エイジズム：Butler によって1969年に初めて紹介さ

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

2 宮崎大学医学部看護学科

れた。Butler は、エイジズムを、人種差別や性差別が肌の色とジェンダーに対して向けられるのと同じように「高齢であることを理由とする、人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス」と定義している¹¹⁾。また、E. B. Palmore は、ある年齢グループに対する偏見もしくは差別であるとし偏見は否定的な固定観念あるいは否定的態度であり、差別とは否定的に扱うことと述べている¹²⁾。以上より、本研究におけるエイジズムは、高齢者に対する偏見と差別とする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

研究対象は、看護系大学1施設の学生で、老年看護学の専門科目の履修が始まる2年生から専門科目の履修を終えた4年生までとした。編入学生はすでに老年看護学実習を終えていること、またこれまでの教育背景が異なることから除外した。研究対象施設における老年看護学の科目進度は、2年次前期に、講義を通して加齢に伴う心身の変化を、後期には講義や演習を通して、老年看護学の総論や各論について学習し、老年期の対象の特徴や対象とその家族に対する基本的援助についての学びを深める。また本研究のテーマであるエイジズムは2年後期の授業内で初めて触れられる。3年次後期には、老年看護学実習において、入院中の老年期にある対象を1名受け持ち、看護過程を通して対象を総合的に理解し、健康障害のレベルや生活背景、ストレングスに応じた看護実践について体験的に学ぶ。また認知症高齢者の特性を理解するためにグループホーム等での実習も行う。3年次の実習を通して、広く高齢者との関わりを持つことになる。4年次には、老人福祉施設等の統合分野実習において、老年期にある対象の在宅における暮らしの理解を深めると同時にそのチームアプローチについても体験的に学ぶ。以上から、一連の老年看護学に関する講義を終えていない時期（2年生）、一連の老年看護学に関する講義を終え、老年看護学実習に行く前の時期（3年生）、老年看護学に関連する実習をすべて終えた時期（4年生）と位置づけし、研究対象に設定した。

2. 調査期間

2016年9月～11月

3. 調査方法とその内容

無記名質問紙調査：各学年がそれぞれ一同に集まる講義または実習オリエンテーション時に質問紙調査を行った。

1) 背景：学生の学年、現在および過去における65歳以上高齢者との同居の有無、老年看護への関心、卒業後もしくは将来的に職場選択として高齢者医療施設（回復期リハビリテーション病院や医療療養型病院など）を考えているかの有無について。

2) 日本語版Fraboniエイジズム尺度（FSA）短縮版14項目（以下FSA）¹³⁾：原田らが開発した尺度で、下位項目「嫌悪・差別（6項目）」「回避（5項目）」「誹謗（3項目）」に分類される。回答方法を「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で求め、5-1点に配点し得点化した（得点範囲：14～70点）。つまり、得点が高いほどエイジズムは高いすなわち高齢者への否定的態度が高い結果となる。なお、尺度の使用にあたっては、開発者に連絡し、使用許可を得て実施した。

4. 分析方法

各学年におけるFSA平均得点および下位項目「嫌悪・差別」「回避」「誹謗」の平均得点の比較を行った。また、高齢者との同居経験の有無におけるFSA得点および下位項目「嫌悪・差別」「回避」「誹謗」得点の比較を行った。学年間の比較には一元配置分散分析を、高齢者との同居経験の有無による比較にはMann-WhitneyのU検定を行った。有意水準は5%とし、統計ソフトはIBM SPSS Version 23.0を使用した。

5. 倫理的配慮

研究責任者が所属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した（許可番号15081824）。対象には文書と口頭で主旨を説明し、質問紙の回答/提出により同意を得たとみなすことを明記および説明した。調査への参加は自由意思であること、無記名で個人は特定されないこと、データは本研究以外には使用しないことを説明し、参加しないことにより何ら不利益を得ないこと、成績には何も影響しないこと等を保障した。また、提出の際にも対象者が特定されないように、鍵付きBOXを指定の場所に設置し、研究者が退出した後に投函できるように配慮した。

Ⅳ. 結果

1. 研究対象者の背景

調査用紙は、全部で204部配布し、202部の回収（回収率99%）、有効回答は200部（有効回答率99%）であった。対象者の背景およびFSA得点を表1に示す。対象者は全体で200名、内訳は2年生66名、3年生66名、4年生68名で、男性20名、女性180名であった。高齢者との同居の有無は、83名（41.5%；2年生28名、3年生26名、4年生29名）が経験あり、117名（58.5%；2年生38名、3年生40名、4年生39名）が経験なしであった。また将来的に高齢者施設での就職は、55名（27.5%；2年生17名、3年生18名、4年生20名）が“考えている”、145名（72.5%；2年生49名、3年生48名、4年生48名）が“わからない”もしくは“考えていない”であった。

表1. 研究対象者の性別と高齢者との同居経験・高齢者医療施設への就職意向 N=200

項目		全体 n=200		2年生 n=66		3年生 n=66		4年生 n=68	
		n	%	n	%	n	%	n	%
性別	男	20	(10.0)	6	(9.1)	10	(15.2)	4	(5.9)
	女	180	(90.0)	60	(90.9)	56	(84.8)	64	(94.1)
高齢者との同居経験	有	83	(41.5)	28	(42.4)	26	(39.4)	29	(42.6)
	無	117	(58.5)	38	(57.6)	40	(60.6)	39	(57.4)
高齢者医療施設への就職	考えている	55	(27.5)	17	(25.8)	18	(27.3)	20	(29.4)
	わからない・考えていない	145	(72.5)	49	(74.2)	48	(72.7)	48	(70.6)

2. FSA 尺度の信頼性と各項目の平均得点

FSA 尺度の各項目における平均得点および下位項目の信頼性を表2に示す。FSA 尺度の信頼性を Cronbachの α 係数で求めたところ下位項目では「嫌悪・差別」0.69, 「回避」0.66, 「誹謗」0.60で、全体では0.77であった。また、各項目の平均得点は、最小1.25±0.51点(設問9)~最大2.45±1.0点(設問3)の範囲内であり、最大でも「どちらともいえない」の3点よりも低い得点であった。

3. 学年別の FSA 得点分布と平均得点および関心度得点

FSA 得点の分布を表3に示す。各学年ともに約4分の3の学生が30点以下であった。FSA 全体の平均得点は、2年生26.7±5.9点、3年生26.8±6.3点、4年生26.0±6.1点であり、学年間の FSA 平均得点に有意差はみられなかった ($P=0.72$)。また、下位項目「嫌悪・差別」の平均得点は、2年生8.9±2.7点、3年生9.2±2.7点、4年生は9.0±2.7点であった。「回避」の平均得点は、2年生

表2. FSA 尺度の信頼性と各項目の平均得点 (全体の Cronbach's $\alpha=0.77$) N=200

下位項目	質問項目	項目平均 mean ± SD	因子平均 mean ± SD
嫌悪差別 ($\alpha=0.69$)	設問4. 高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう	1.53±0.75	9.04±2.66
	設問5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	1.44±0.62	
	設問6. 高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時には感謝すべきだ	1.47±0.69	
	設問9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	1.25±0.51	
	設問10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	1.97±0.98	
回避 ($\alpha=0.66$)	設問11. 高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	1.40±0.60	10.53±3.15
	設問7. もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	2.08±1.02	
	設問8. 個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	1.84±0.85	
	設問12. a) 高齢者との付き合いは、結構楽しい	2.28±1.10	
	設問13. できれば、高齢者と一緒に住みたくない	2.34±0.99	
誹謗 ($\alpha=0.60$)	設問14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	1.99±0.86	6.91±2.12
	設問1. 多くの高齢者は、けちでお金や物を貯めている	2.14±0.90	
	設問2. 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	2.31±0.98	
	設問3. 多くの高齢者は、過去に生きている	2.45±1.00	

a) 設問12のみ逆転項目として、「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」を1点~5点に配置し、その他の設問は5点~1点に配置した。

表3. FSA 得点分布と FSA 平均得点・関心度得点の学年比較 N=200

	全体 n=200		2年生 n=66		3年生 n=66		4年生 n=68		P
	n	%	n	%	n	%	n	%	
FSA 得点									
15点以下	5	(2.5)	2	(3.0)	2	(3.0)	1	(1.5)	
16-20点	32	(13.0)	5	(7.6)	13	(19.7)	14	(20.6)	
21-25点	51	(25.5)	24	(36.4)	10	(15.2)	17	(25.0)	
26-30点	57	(28.5)	19	(28.8)	22	(33.3)	16	(23.5)	
31-35点	38	(19.0)	10	(15.1)	13	(19.7)	15	(22.1)	
36-40点	15	(7.5)	4	(6.1)	6	(9.1)	5	(7.3)	
41点以上	2	(1.0)	2	(3.0)	0		0		
		mean ± SD		mean ± SD		mean ± SD		mean ± SD	
FSA 平均得点									
全体		26.5 ± 6.1		26.7 ± 5.9		26.8 ± 6.3		26.0 ± 6.1	0.72
下位項目「嫌悪・差別」		9.0 ± 2.7		8.9 ± 2.7		9.2 ± 2.7		9.0 ± 2.7	0.84
下位項目「回避」		10.5 ± 3.2		10.6 ± 3.1		10.8 ± 3.2		10.2 ± 3.2	0.52
下位項目「誹謗」		6.9 ± 2.1		7.1 ± 2.1		6.8 ± 2.2		6.8 ± 2.1	0.60
関心度得点		5.8 ± 2.1		5.7 ± 2.2		5.6 ± 2.1		6.2 ± 2.1	0.30

一元配置分散分析

10.6±3.1点, 3年生10.8±3.2点, 4年生は10.2±3.2点, そして「誹謗」の平均得点は, 2年生7.1±2.1点, 3年生6.8±2.2点, 4年生は6.8±2.1点であった。下位項目のいずれにおいても, 学年間で有意な差はみられなかった(それぞれ, $P=0.84$, $P=0.52$, $P=0.60$)。さらに, 老年看護に対する関心度得点の平均は, 2年生5.7±2.2点, 3年生5.6±2.1点, 4年生は6.2±2.1点と, こちらについても学年間で有意な差はみられなかった($P=0.30$)。

4. 高齢者との同居経験の有無による FSA 得点

高齢者との同居経験の有無における FSA 得点の中央値(25%値-75%値)は, 同居経験ありが25.0(22.0-30.0)点, 同居経験なしが27.0(22.0-31.5)点で有意な差はみられなかった($P=0.65$)。また, 下位項目「嫌悪・差

別」の中央値(25%値-75%値)は, 同居経験ありが8.0(7.0-10.0)点, 同居経験なしが9.0(7.0-11.0)点, 「回避」の中央値(25%値-75%値)は, 同居経験ありが10.0(8.0-13.0)点, 同居経験なしが11.0(8.0-13.0)点でそれぞれに有意な差はみられなかった(それぞれ, $P=0.34$, $P=0.22$)。一方で, 「誹謗」の中央値(25%値-75%値)は, 同居経験ありが7.0(6.0-9.0)点, 同居経験なしが7.0(5.0-8.0)点と有意な差がみられた($P=0.03$) (表4)。なお, 下位項目「誹謗」の設問内容は, 「高齢者は古くからの友人でかたまって, 新しい友人をつくることに興味がない」, 「高齢者は過去に生きている」, 「高齢者はけちでお金や物を貯めている」の三項目で, 高齢者への誤解を示すといった内容であった。

表4. 高齢者との同居経験の有無における FSA 得点の比較

	同居経験あり群		同居経験なし群		P
	中央値	(25%値, 75%値)	中央値	(25%値, 75%値)	
FSA 全体得点	25.0	(22.0, 30.0)	27.0	(22.0, 31.5)	0.65
「差別」得点	8.0	(7.0, 10.0)	9.0	(7.0, 11.0)	0.34
「回避」得点	10.0	(8.0, 13.0)	11.0	(8.0, 13.0)	0.22
「誹謗」得点	7.0	(6.0, 9.0)	7.0	(5.0, 8.0)	0.03*

Mann-Whitney のU検定 * $P<0.05$

V. 考察

本研究は看護学生に対し, エイジズムを測る FSA 尺度を用い, 学生が潜在的にもつ高齢者に対するエイジズムを調査した。エイジズムが強いと高齢者に対するイメージが悪くなり, 高齢者に対する援助に支障をきたす恐れがある。また, 老年看護学の学習効果にも影響すると考える。さらには, 高齢者施設に対する偏見も可能性としてあることから就職を避けることも考えられる。看護学生のエイジズムの実態を知り, 現代学生がもつ高齢者に対するイメージを把握することは, 高齢者医療を担う人材育成において重要であると考えられる。

全学年を通しての FSA 平均得点は26.5±6.1点と, 他の看護学生の結果(27.7±6.1点)¹⁴⁾や一般の若者男性の結果(31.7±7.7点)¹⁵⁾より得点が低く, 本研究対象者におけるエイジズムの低さ, すなわち対象者の高齢者に対する否定的イメージが弱いことが伺えた。特に, 下位項目「嫌悪・差別」の6項目において, それぞれの平均得点が2点以下であったことは, 差別的な偏見の低さが示された。これにはすべての研究対象者が2年次に基礎看護学実習を経験し, その際に高齢者と接触した経験が影響したことも考えられる。さらに, 高齢者に対する態度において, 本調査では男女差はみられなかった($P=0.46$)が, 女性より男性の方が否定的な態度を示したといった調査¹⁶⁾からも, 今回の研究対象者の9割が女性といった性差による結果への影響も考えられる。

各学年間における全体 FSA 平均得点や各下位項目の

平均得点での差が認められなかった。このことは, 今回調査はできていない研究対象者の特性やこれまでの教育背景にもよるが, 現在の老年看護学教育の内容の中で学生が持つ高齢者イメージの変容まで影響していないことを示唆するかもしれない。しかしながら, 看護学生を対象とした先行研究では, 学生の高齢者に対するイメージが老年看護学の学習後により否定的に変化することや, 実習終了後の高学年ほど高齢者に対する否定的イメージが強いことが報告されている^{5,17)}。また, 村田らは経験年数の多い看護婦が高齢者に否定的イメージをもつ傾向があると指摘し, 看護婦が健康障害をもつ高齢者と日常的に関わることにより, 高齢者の多様性や高齢者が維持している能力への関心が低下する可能性を示唆した¹⁸⁾。一方で, 佐野らは実習後の認知症高齢者看護体験の有無における FSA の平均値の差に有意な差を認め, 実習対象となる個人の高齢者への理解や関心が高まることで, さらにエイジズムが低くなったと報告している¹⁹⁾。こういった経験や老年看護学の履修状況の違いによる変化を把握するためには, 今回のような横断的調査ではなく, 縦断的な調査を行うことが求められる。

高齢者との同居経験の有無による全体の FSA 平均得点の違いは認められなかったが, 下位項目「誹謗」に関する FSA 得点は同居経験ありで有意に高かった。このことから, 本研究において, 高齢者との同居経験がある学生は, 同居経験がない学生より高いエイジズム, すなわち高齢者に対する否定的なイメージが強いことが示さ

れた。下位項目「誹謗」には、「高齢者は古くからの友人でかたまっ、新しい友人をつくることに興味がない」、「高齢者は過去に生きている」、「高齢者はけちでお金や物を貯めている」といったステレオタイプのような否定的な認知成分を示す概念として位置づけられる¹³⁾。同居経験は高齢者の肯定的な側面だけではなく、否定的な側面についても印象付けられ、高齢者への誤解に影響を及ぼす可能性が考えられる。先行研究では、肯定的イメージの形成に高齢者から世話を受けた経験²⁰⁾や高齢者との会話頻度などの経験が関連するといった報告がみられる^{21, 22)}。本研究においても、高齢者との同居といった高齢者になじみを持つことが、単純に高齢者に対する肯定的態度を生じさせるわけではなく、高齢者との関わりの質が高齢者への誤解に影響したものと考える。なじみ深い対象には肯定的な特性が関連づけられやすく²³⁾、高齢者に対するなじみ深さは肯定的なイメージの顕現性を高めることが報告²⁴⁾されていることから、エイジズムを評価するにあたり、なじみの深さといった交流の内容の影響も検討していく必要がある。

本研究では、研究対象者のエイジズムが全体的に低いことや老年看護への関心度が各学年間で差がないことが示された。高齢者に対する否定的な感情を持つことがエイジズムを強くし、高齢者とのコミュニケーションを阻害する要因となること¹³⁾や看護の質への影響も懸念されていること²⁵⁾、またエイジズムが強い学生は、将来高齢者を対象とした職場を選択しないといった看護の就職選択に影響するといったこと²⁷⁾からも、看護学生の高齢者に対する肯定的なイメージへの変化は、就職選択に加え、老年看護学教育の興味や関心という点からも重要な課題である。これまで、看護学生の高齢者に対するイメージが認知症看護を含む老年看護の実習を体験することで、高齢者の特徴を理解していくと共に、高齢者に対するイメージが肯定的に変化する側面があることやエイジズムを低下させることが報告されている^{19, 26-28)}。村田らは、学生が高齢者の話や生活体験を聞き交流する体験が、高齢者理解には重要であると述べている²⁹⁾。また、佐野らは学生が実習において高齢者と実際に関わり、その人の尊厳や尊重する関わり的重要性を実感することが、エイジズムを弱くする経験になると述べている³⁰⁾。学生が高齢者の多様性のみならず、健康な高齢者の生活や保健活動について理解できるよう意図的に教育内容を設定していく必要がある。玉井は、健康な高齢者との交流体験によって、学生の肯定的イメージの変化が生じたことと報告し、学生の身近に存在する高齢者との対話を取り入れた授業の工夫などにより、高齢者への関心が強化されると述べていた³¹⁾。したがって、学生が地域において日常生活を送る高齢者から直接的に経験できる講義内容は学生の老年看護に対する関心度を向上させ、エイジズムを低くするのに効果的であるといえる。

さらに、高齢者のイメージが肯定的になる要因として

加齢への知識の有無が挙げられる。加齢に関する知識については、25項目からなる *Palmore's Facts on Aging Quiz (FAQ)* がもっとも頻繁に用いられている尺度のひとつである^{32, 33)}。この尺度は、否定的および肯定的なバイアスの得点を算出することも可能であり、エイジズムを弱めるための教育・介入プログラムの効果測定にも用いられてきた³⁴⁾。エイジズムは、加齢の知識が増えれば、高齢者に対する態度も肯定的なものになるとの報告³⁵⁾や、高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズム及び高齢者イメージとの関連性から、エイジズムを排除するには高齢者の結晶性能力を実感する体験の重要性が報告されている³⁶⁾。高齢者のイメージの変容には、高齢者疑似体験のような実際に学生が体感する演習も重要であると考えられる。2年次の高齢者疑似体験を通して、学生は高齢者の加齢に伴う変化について理解し、介助のあり方についての気づきの有無が実習に影響することが報告されている³⁷⁾。高齢者に対するイメージの変容をもたらす教育は、将来の高齢者看護を担う学生が高齢者の思いに沿い、高齢者の尊厳を支えるケアにつながると考える。

現代社会は、65歳以上の高齢者単独世帯が増加し、65歳以上の者がいる世帯のうち三世帯世帯は、2001年度の25.5%から、2010年度には16.2%に減少している³⁸⁾。こうした家族構成の変化は、学生の日常的な高齢者との接触機会が減ることへとつながり、日常生活において高齢者を捉えることが困難になっている。学生は、関わりを通じて高齢者の反応を読み取りながら対象者理解を進めていく特徴があるため、実習などで受け持つ高齢者との相互行為は、その後の学生の高齢者理解に大きく影響する可能性が考えられる。特に、関わった高齢者の特性や学生との相互行為の質などは大きな影響要因となる³⁹⁾といえる。今後の老年看護を担う人材の育成には、教育の中での加齢に関する知識の獲得はもちろんのこと、実習や演習を通しての接触体験や疑似体験などの機会を提供し、かつその経験の質を高めるための演習のフィードバックや実習時のカンファレンス等での働きかけが重要である。

VI. 研究の限界

本調査は1大学のみでの調査に加え、1年生を対象としていないことから、看護学生のエイジズムとして一般化できるとは言い難い。また、FSA 下位項目「誹謗」の信頼性が、 $\alpha=0.60$ と低かったことから結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。さらに、本調査は横断的な調査であり、対象者の老年看護学の履修前後の変化を測ることはできなかった。今後は老年看護及び介護を担う学生らの縦断的な調査も視野に入れて多施設での研究をすすめていく必要がある。

VII. 結論

本研究の対象者は、2年次に老年看護学の講義及び演

習, 3年後期に老年看護学実習, 4年次に高齢者福祉施設等の統合分野実習を経験する。本研究では, 老年看護学の履修状況によるエイジズムの違いはみられなかったが, 全体的に高齢者に対する否定的イメージは弱いことが示された。一方で, 否定的イメージが弱い中であっても, 高齢者との同居経験なしの学生に比べて, 同居経験ありの学生で, 高齢者への否定的な誤解が強い傾向にあった。エイジズムが強い人ほど高齢者イメージが悪くなり, 援助に影響することからも, 老年看護を担う看護学生の育成に向けて, 継続して学生のエイジズムを含めた高齢者に対するイメージを把握する必要がある。また, 高齢者に対する偏見をなくすために, 高齢者との接触機会やその質の向上を考慮した老年看護学教育を構築していく必要がある。

Ⅷ. 文献

- 1) 大和三重: 介護労働者の職務満足度が就業継続意向に与える影響。介護福祉学, 17: 16-23, 2010.
- 2) 穴井美恵, 萩野朋子, 大平政子: 看護大学生の高齢者のイメージ 高齢者施設における実習前後の変化。中京学院看護学部紀要, 2 (1): 11-17, 2012.
- 3) 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子: 高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化 看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から。聖隷クリストファー大学看護学部紀要, (11): 119-126, 2003.
- 4) 太湯好子, 酒井恒美, 初鹿真由美, 杉田明子: 看護学生の老人に対する否定的イメージ-老人看護教育についての一考察-。第21回日本看護学会集録-看護教育, 112-115, 1990.
- 5) 大谷英子, 松木光子: 看護学生の老人イメージの特性について-一般大学生との比較から-。日本看護研究学会誌, 16 (3): 75-6, 1993.
- 6) 鎌田ケイ子: 老人看護論, 全国老人ケア研究会, 東京, 1993: 36.
- 7) DeKeyser GF, Kahana S: Perceptions of Israeli student nurses regarding clinical specialties and factors that influence these perceptions. *J Adv Nurs*. 56(1): 88-98, 2006. DOI: 10.1111/j.1365-2648.2006.03983.x
- 8) Kloster T, Høie M, Skår R: Nursing students' career preferences: a Norwegian study. *J Adv Nurs*. 59(2): 155-62, 2007. DOI: 10.1111/j.1365-2648.2007.04276.x
- 9) 高崎絹子, 坂口千鶴, 谷口好美: 老人看護学の理念と教育の展開。Quality Nursing, 1(7): 17-33, 1995.
- 10) Butler RN: Age-ism; Another form of bigotry. *Gerontologist*, 9: 243-246, 1969.
- 11) Butler RN: Ageism. In *The encyclopedia of aging*. 2nded., ed. by Maddox GL, 35'36, Springer, New York, 1995.
- 12) Palmore EB: Ageism: Negative and positive. 2nded., Springer, New York, 1999. 鈴木研一訳: エイジズム; 高齢者差別の実相と克服の展望, 明石書店, 東京, 2002.
- 13) 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽予: 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成-都市部の若年男性におけるエイジズムの測定-。老年社会科学, 26 (3): 308-319, 2004.
- 14) 高野真由美: 看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響。川崎市立看護短期大学紀要, 15 (1): 47-51, 2010.
- 15) 原田謙, 杉澤秀博, 柴田博: 都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因。老年社会科学, 29 (4): 485-492, 2008.
- 16) Soderhamn O, Lindencrona C, Gustavsson SM: Attitudes toward older people among nursing students and registered nurses in Sweden. *Nurse Educ Today*, 21(3): 225-9. DOI: 10.1054/nedt.2000.0546
- 17) 吉尾千世子, 片桐美智子: 看護学生の老人に対するイメージの変化。順天堂医療短期大学紀要, 4: 43-9, 1993.
- 18) 村田裕子, 安村茂子, 宮先知, 田中早苗: 看護婦の経験年数別にみた老人イメージとコミュニケーションスキルの検討。第28回日本看護学会集録-老人看護, 145-8, 1997.
- 19) 佐野望, 檜原登志子, 米良千代: 看護学生の高齢者看護実習前後のエイジズムの変化について-認知症高齢者看護の体験の有無による相違。日本看護学会論文集-老年看護, 41: 164-167, 2010.
- 20) 高野真由美: 看護学生の背景による老人イメージ・知識・エイジズムの相違。第38回看護教育, 147-149, 2007.
- 21) 大谷英子, 松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究:(1) 大学生の老院イメージと生活経験の関連。日本看護研究学会学会誌, 18 (4): 25-38, 1995.
- 22) 久木原博子, 内山久美, 二重作清子, 原理恵, 浅田有希, 木部泉: 青年期にある人のエイジズムに関連する要因。看護保健科学研究誌, 13 (1), 57-64, 2013.
- 23) Zajonc RB: Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, Monograph Supplement, 9: 1-27, 1968.
- 24) Cuddy AJC, Norton MI, Fiske ST: This old stereotype: The pervasiveness and persistence of the elderly stereotype. *Journal of Social Issues*, 61: 267-285, 2005.
- 25) 小川妙子: 看護学生の高齢者へのエイジズム-1年生と3年生のFAQの比較-。順天堂医療短期大学, 12: 35-45, 2001.
- 26) 前畑夏子, 服部ユカリ, 成瀬優知, 大野昌美: 老人

- 看護実習による看護大学生の老人イメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌, 2: 103-116, 1999.
- 27) 大渕律子, 鎌田ケイ子, 巻田ふき: 看護基礎教育終了時の老人に対するイメージ-老年看護の教授の有無による比較-. 第22回日本看護学会集録-看護教育, 87-9, 1991.
- 28) 太湯好子, 伊東久恵, 池田敏子, 人見裕江, 桜井桂子: 老人に対するイメージとその形成に影響する因子(第三報)-因子分析を用いて-. 第23回日本看護学会集録-看護教育, 153-4, 1992.
- 29) 村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美: 看護学生のエイジズムに関する要因-老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化-. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4: 12-17, 2008.
- 30) 佐野望, 檜原登志子, 赤坂寛子: 看護学生の高齢者の知識と看護の学びによるエイジズムの関連-高齢者看護学実習 I の学習効果-. 共立女子短期大学看護学科紀要, 5: 7-16, 2010.
- 31) 玉井保子: 地域にいる老人との交流を深めた老人看護実習の初期ステップ. 第20回日本看護学会集録-看護教育, 57-9, 1989.
- 32) Palmore EB: Facts on aging; A short quiz. The Gerontologist, 17: 315-320, 1977.
- 33) Palmore EB: The facts on aging quiz; A handbook of uses and results. 2nd ed., Springer, New York, 1998.
- 34) 畑野相子, 北村隆子, 安田千寿: 老年看護学教育プログラムが高齢者イメージ形成過程に影響する要因. 人間看護学研究, 18: 35-45, 2010.
- 35) 田中弥生, 中平みわ, 松浦真理子, 三村洋美: 高齢者に対する態度・知識およびイメージに関する文献検討-看護教育への提言. 三育学院短期大学紀要, (36): 34-42, 2007.
- 36) 畑野相子, 簗原文子: 高齢者の結晶性能力の受け止め方と看護学生のエイジズム及び高齢者イメージとの関連. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 (1): 35-39, 2014.
- 37) 原村幸代, 川越竜一: 高齢者疑似体験が生活の場実習における学生の高齢者への関わりに及ぼす影響; 実習後のアンケート調査からの分析から. 日本看護学会論文集看護教育, 45: 39-42, 2015.
- 38) 一般財団法人厚生労働統計協会編: 国民衛生の動向・厚生 of 指標増刊, 厚生労働統計協会, 東京, 2011, 58 (9): 39-44.
- 39) 谷本真理子, 鳥田美紀代, 田所良之, 高橋良幸, 正木治恵: 老人ケア施設実習における高齢者理解のための方法としてのナラティブ面接の意義. 千葉大学看護学部紀要, 31: 27-31, 2009.

A study of nursing students' ageism

Koji YOSHIDA¹, Mayumi TSUJI², Ayako HARADA¹, Yusuke OYAMA¹

Junpei TAKESHIMA¹, Harumi MIYAHARA¹

1 Department of Health Sciences, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

2 School of nursing Faculty of Medicine University of Miyazaki

Received 8 March 2017

Accepted 22 May 2017

Abstract

Objective: In Japan, the demand for elderly medical care is on the rise as the elderly population increases, and nursing students have become human resources responsible for their medical care. The purpose of this study was to assess gerontological nursing education and the ageism of nursing students.

Methods: We conducted a questionnaire survey among nursing students (n=200), including 2nd year, 3rd year, and 4th year, from September to November 2016. The questions assessed nursing students' demographic factors, experience living with the elderly, and the Fraboni Scale of Ageism (FSA). We then compared the average FSA score for each grade.

Results: The FSA score of the study subjects had an average score of 26.5±6.1 (range:14-41) points. By grade, it was 26.7±5.9 points for 2nd year, 26.8±6.3 points for 3rd year, and 26.0±6.1 points for 4th year. There was no significant difference in the average FSA score by grade level ($P=0.72$). However, in the comparison of experience living with the elderly, the "Slander" score of FSA sub items was significantly higher in the group with living experience ($P<0.05$).

Conclusion: In this study, the cross-sectional survey revealed that there was no difference in ageism according to grade, but there are difference in living experience with the elderly. In the future, it is necessary to evaluate the relationship between ageism and gerontological nursing education with a longitudinal survey.

Health Science Research 30 : 39-46, 2017

Key words : the elderly, ageism, nursing student, gerontological nursing, the Fraboni Scale of Ageism (FSA)